

木曽川



木曽川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。
秋号は伊吹山に抱かれた春日村から、
その歴史と揖斐川支流粕川の改修工事を中心に
歴史ドキュメントでは、
日蘭交流四百年の軌跡をシリーズでお届けします。

INDEX.....

ふるさとの街・探訪記《春日村》

森とともに生きる村、春日村

AREA REPORT

粕川改修、その歴史的な道のり

気ままにJOURNEY

森に学び森で癒す、伊吹山薬草ウォッチング

歴史ドキュメント

オランダが残した近代化の軌跡

TALK&TALK

明治改修と地域の人々

民話の小箱

長者平の金鶏伝説



森ととも生きる村 春日村

伊吹山の急峻な山々に囲まれた春日村は、森とともに生きる村。

伝承によれば、古代、大規模な鍛冶場があったとされ、一九九四年には、それを裏付けるような遺物も発見されています。

しかし、古代和鉄技術の衰退とともに、赤い焔も消えて、深い緑に覆われた村に。南北朝の争乱や関ヶ原の合戦に巻き込まれながらも、山々の厳しい自然や実りともにも歴史を重ね

現在では、「森に学び森と暮らす村」をめざして、さまざまなプロジェクトを実施しています。



春日村 村役場周辺 空撮

伊吹山に抱かれた薬草の里

岐阜県の西部に位置する春日村は、伊吹山の急峻な山々に囲まれた峡谷煎米の山村です。伊吹山を源とする長谷川、此の貝月山に源を発する美川が山あいを縫って美しいせせらぎをみせ、二つの河川は川合で合流し粕川に。揖斐川町付近で揖斐川に合流しています。

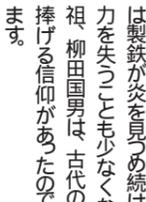
春日村の約96%を山林・原野が占めており、その標高差が大きいのが特徴。集落は河川に沿うように点在しています。

伊吹山に原生する薬草は古代から春日村の特産品です。また、山の傾斜面では春日茶が栽培されています。この他にも「コノマク・シイタケ」などが栽培されており、造林事業も進められています。

春日村の鍛冶集団

一九九四年、川合にある鍛冶屋平と呼ばれる場所で発見されたいくつもの鉄滓は、大古大規模な鍛冶場があったことが伝承を裏付けています。

鉄滓が発見された鍛冶屋平近くに鎮座する川合六社神社の祭神は、製鉄や鍛冶を司る「一目の神」。製鉄民が一目の神を信仰する例は世界的にみられますが、それ



川合六社神社

は製鉄が炎を見続ける仕事であるため、視力を失うことも少なからず。民俗学の祖、柳田国男は、古代の鍛冶師は、片目を神に捧げる信仰があったのではないかと指摘しています。

そんな鍛冶屋集団がいたことを伝承しているのが、長者平の伝説です。大和生まれの粕川長者が、政争で破れた皇族一統と落ち延びたのが春日村の長者平です。粕川長者は先住民との融和を図り、山や川から砂金・銀・銅を採取する技術を教え、収穫は平等に配布。長者率いる村人もよく働いたため、宋えに栄え、二百戸に及び村になったそうです。



春日村風景



長者平遺跡周辺

つたのでしよう。しかしこの和鉄古代技術も奈良時代を迎えるころ衰期に入り、かつて真鉄を吹いた製鉄炉の赤い焔は消え、代わって緑の森林が伊吹の峰々を深く覆うようになたのでした。

土岐氏と小島城

中世の春日村は、京都の青蓮院領であった小島荘の荘域に含まれていました。室町時代に、美濃国守護土岐頼康が小島城を居城としていました。その城跡は春日村六合子東山の山の上、その後土岐氏が勢力争いが起き、元中七年（一三九〇）、將軍足利義満にそむいたとして攻められ、小島城は落城しています。



史蹟小島城跡

関ヶ原合戦の余波

慶長五年（一五九四）豊臣秀吉亡き後の天下を競った関ヶ原の合戦が起きました。関ヶ原とは山を隔たただけの春日村も、その影響を受けていたのです。というのも、敗れた西軍の敗走ルート、石田三成のつた北国街道方向を通る江州方面か、小西行長と宇喜多秀家のつた春日村長谷川沿いへ出る尾根道のいずれか。数奇の運命をたどって刑場の霧を消えた敗將の末路についての後世語りや、記録者の潤色により相違が生じる例はよくあることで、小西行長の敗走も、関ヶ原山中で捕らえられたことも、あるいは関ヶ原を越えた草津で捕らえられたと

山の暮らしの不文律

江戸時代の春日村は、大垣城主の領地でした。幕藩体制が整備された江戸初期、幕府は山林制度を実施。山地は、百姓持林と領主所有の林に分けられ、厳しく管理されました。

大垣藩では、春日村や根尾筋の山地を管理するために、山横目（ついでに役を置き、久瀬村の高橋氏が代々の役を務めていました。当時、山林の個人所有は極めて少なく多くは領主所有の御山林や共有山林の人々持林でした。

共有山林は薪の採取や、肥料、飼料の草を刈ったり、屋根材料の茅を採取する刈場でした。このなかでも飼料用の草は自由刈取が許されていました。したが、屋根用の茅を採る茅場や冬の牛の飼料とする乾草をつくる草場は半ば個人所有の地のような占有が許されており、共有林といえども、他人の採取や刈取を禁じていました。



小西行長画像

も、はまた伊吹山地を隔てた春日村で捕らえられたとも、伝えられています。

春日村に伝わる敗走伝承は、伊吹山を越えた小西行長は春日村中山にたどりつき、いたんはかくまわれたものの、破格の懸賞金から村人に通報され、ついに捕らえられたとが、この村人の裏切りを知った行長は、いつかこの村を真赤にして仕返しをするのだと心に誓ったのでした。その後、中山にはたびたび火災があり、江戸中期の大火では、人家・社寺・山林のほぼ大半が灰になってしまいました。このことから、行長の祟りを畏れた村人は、記念碑を建立し、供養を行ないました。

この伝承が果たして事実か否かは今では知る由もありませんが、合戦後の大掛かりの捜査が春日村にも及んでいたことをうかがい知ることができます。

災害と飢饉

急斜面での農作業や炭焼作業など、山の暮らしは過酷な労働で支えられていました。それにも増して、山村の人々を苦しめたのは、風水害やそれに伴う山崩れ・川欠け・砂入れなどに伴う耕地の荒廃や旱魃・冷害・霜害、地震などの天災の襲来でした。この地域一帯の洪水災害の初見文書は元禄一四年（一七〇一）九月。大雨により揖斐側川筋の堤防が決壊し、広範な地域に被害を与えています。

「つた藩による山林制度の他に、春日村には山林に生じる不文律がありました。古来より山の民は、慢性的な食糧不足という問題を抱えていたため、自生する山の幸にそれを求めていました。この古今を通する食糧採取の鉄則が山の不文律を生み、春日村では昭和の時代まで不文律に基づいた暮らしが営まれていました。

その一つは栗の木についてであり、もう一つは栃の木について。これらは山村にとって重要な山の幸。木炭を特産とする春日村では、雑木山で盛んに木炭用の樹木が採取され、売買されましたが、そのなかに交じっている栗の木だけは伐採されることがありませんでした。栗の実が集落共同の食糧の一つだったからです。

また、春日村の谷々の栃の木は、二丈、三丈廻りというも珍しくありません。それは栃の木の伐採を禁じた不文律を守ってきたからで、栃の木の伐採禁止は大垣藩の方針でもありましたが、しかも、その土地を売買する場合でも、栃の木の生い立つ一坪の土地は、栃の木とともに残すことになっていました。集落共同の食糧である栃の木の伐採を恐れたためです。この不文律を春日村の人々は、栃林権と称し、栃林権だけは登記することなく不動産の売買が行なわれていました。登記をしていなければ、何かのトラブルが生じた場合、法律的な措置ができないという問題も残りますが、「春日村では、登記よりもむしろ不文律のほうが大きな力を発揮したのでしよう。これも山村に住む人々の強い共存意識の表れだといえます。

森に学び森とともに生きる村

近代という夜明けを迎えた明治時代、明治二三年には現在の春日村が成立し、同三〇年には揖斐郡が誕生しています。明治後期から大正時代には、小宮神発電所や春日発電所が相次いで建設され、急峻な山々に囲まれた春日村にも電灯が点くようになりまし。

第二次世界大戦中には、食糧増産という国家政策のもと、水田を開墾。古くから炭焼きの村として成長した春日村の暮らしはゆるやかに変貌していきます。しかし、若者の流出、高齢化など、現代にいたっても大きな課題を残しており、その整備に向けて各種施策を展開。森に学び森と暮らす村」をめざして、生活環境の基盤整備や産業の振興などさまざまなプロジェクトを実施しています。

参考文献
『春日村史』上下巻昭和五八年春日村
『森の国通信』
七、四〇号一九八三年森の文化博物館発行
岐阜県地名大辞典、角川書店

オランダが残した近代化の軌跡

日蘭交流四〇〇年という記念すべき年。

一六〇〇年、日本に一隻のオランダ船が日本に漂着して以来、オランダは近世日本に西欧の灯火を照らし続けてきました。そして、開明の明治時代には、河川・港湾の土木分野の発展に貢献、近代土木の礎を築いています。

日蘭交流、そのルーツ

荒海に呑まれながらも、難破寸前で九州の豊後に漂着したオランダ船「リーフデ号」。その漂着こそ、日蘭交流四〇〇年の出発点です。関ヶ原の合戦に先立つこと約六か月前、慶長五年三月一六日の出来事でした。

当時のオランダはスペインからの独立を宣言し、ヨーロッパの新興勢力として徐々に力をつけ、自力で東洋進出を試みるようになっていました。リーフデ号は、一五五八年に東洋へ派遣された五隻の艦隊の一隻。この航海は苦労の連続で出港時、一〇〇名もの乗組員が漂着時には一四名に。その内、歩くことができたのは約六名という惨憺たるものでした。

生き残った乗組員のなかには、徳川家康に登用された航海士、ウイリアム・アダム・三浦按針(や商人のマン・ヨーステンが含まれており、医学や科学技術、書物などの西欧文化を近世の日本にもたらしました。東京都の八重洲はヨーステンの名前に由来するもので、オランダの影響力をしるはせる一例といえます。

リーフデ号は家康の命令で堺に周航され、難破船として没収されますが、その後、廻船途中に暴風雨にあり、船そのものは大破。しかし、積荷のうち、大砲、小銃、砲弾、火薬等は家康が活用し、天下分け目の関ヶ原の合戦にもそれが使われて、リーフデ号の砲手たち

も参加した可能性が強いといわれています。

近世日本に西欧の灯火

寛永一一年(一六三三)から始まった鎖国令により、日本は長い眠りの時代に入りました。この間、唯一日本との交易を許されたのがオランダ。長崎からオランダ商館を移転して、西欧文化の灯火を照らし続けました。こうして幕末の開国まで、出島はオランダ東インド会社の長崎支店となり、高い収益を上げていた数少ない商館の一つでした。

そして、日本の開明を告げる明治維新。嵐のような動乱の時代に、植民地化されることもなく、近代化の道を進むことができたのはオランダとの交流をなくしては語ることができません。二〇〇年にも及ぶ鎖国政策のなかで、西欧文化や文明をもたらしたオランダは、日本の近代化にも大きな影響をもたらすことになりました。

オランダ人技師団の招聘

混迷する江戸末期、西欧列強諸国の船舶が来航し、通商要求が高まるなかで、依然、門戸を開放しようとしないうる徳川幕府に対し、オランダは天保一四年(一八四三)、国王ウィレム二世の名で国書を送り、鎖国政治を続け

だしい困難な地区にも関わらず、二つの主要都市を貫いて鉄道を通すこと、そして径間150mという鉄道用の金属製の大きな固定橋がある。150mの径間はこれまで達成されたことがない。これらは設計の点でも大いに興味をそそり、また、そのうちの幾つかは構築技法の上で新たな展望を開くような一連の工作物をなしている(要約)

欧米の先進諸国には一歩も遅れをとっていたオランダですが、ほぼ海面下という立地条件が、他を圧する土木技術にながらったのでしよう。木戸孝允らの反対はあったものの、結局、河川・港湾土木はオランダに一任されることになりました。

治山治水の思想

日本政府が河川・港湾事業のために招聘したオランダ人技術者は表に示すとおりです。オランダ人技師は総勢一〇名、技師はドール

ンら六名で、粗朶工や石工などの下手が四名でした。この技師団を率いていたのがドールンで、東京の土木寮に本拠を置き、全国を統括しました。彼の指揮のもと、リンドウが利根川や江戸川などの東北日本を担当、ツァセル、ツァセン、デレーケは淀川を主とする西南日本を担当しました。

オランダ技師団のうち、明治五年二月、最初に来日したドールンとリンドウは、四月に入ると、早速利根川を踏査し、下総の境野茨城県境町へ日本最初の量水標を設置して近代的河川計画作成の準備作業にとりかかりました。これより、オランダ技師団は日本全国の河川・港湾・砂防・灌漑など、各種の土木事業について指示を与え、計画を作成し、明治時代の日本における土木事業の基礎を築きました。

土木寮 雇傭オランダ人技術者一覧

名前	資格	月給 (来日当初)	雇傭期間								
			明治5	10	15	20	25	30	35		
ドールン C.J.Van Doorn (1837~1906)	長工師	500円	5.2.16	9.4.2	13.7.22						
エッセル G.A.L.Escher (1843~1939)	1等工師	450円	6.9.25	1.6.30							
ムルデル A.T.L.R.Mulder (1848~1901)	1等工師	475円		12.3.25	19.6.12	20.5	23.5.11				
リンドウ I.A.Lindo (1847~?)	2等工師	400円	5.2.9	8.10							
チッセン A.H.T.K.Thissen (1839~?)	3等工師	350円	6.1.15	9.11.14							
デレーケ J.de Rijke (1842~1913)	4等工師	300円	6.9.25						36.6.18	35	
ウェストルウィル J.N.Westerwiel (1839~?)	工手	100円	6.11.15	11.11.14							
カリス J.Kalis	工手	100円	8.5.14	10.5.13							
アルンスト D.Arnst	工手	100円 (推定)	6.9.25	13.12.27							
マイトレクト A.van Mastrigt	工手	100円 (推定)		12.3.29	14.2.4						

流量などの用語もしくは概念が、日本語として生まれたのであり、堤防の設計方法や保護の仕方などがはじめて合理的かつ実務的に示されました。

ドールンはまた、淀川水系上流の天神川京都府山崎町の水源崩壊地を視察して、「禿山砂防工法を政府に提出しています。このなかでドールンは、幼樹を斜面及び崖に植えること、藁を斜面に差し込みこれを覆うこと、木石、砂で溪間に堰をつくこと」などを強調しています。

「川を治めるには、まず山を治めるべし」これがオランダの技師に共通する考えでした。

デレーケの功績

オランダ人技師団のなかで、最も長く日本に在任し、土木技術に貢献したのは明治六年に来日したヨハネス・デレーケです。当初、淀川の改修計画を担当したデレーケは流域の荒廃山地よりの土砂流出の防止を目的に、不動川上流(京都府山崎町)にわが国最初の巨石砂防堰堤を施工しました。この時試みられた工法は、やがて「オランダ工法」または「デレーケ工法」と称されるようになりますが、こうした成果は徐々に明治政府に注目されることとなりました。

来日当初、西日本を担当したデレーケは、明治八年にリンドウが帰国、同九年にツァセンが退職、明治一一年に親友のツァセルが帰国、さらに明治一三年にドールンが帰国すると、東京の内務省に戻り、各地の工事に関与することになりました。

最も長く日本に在任したデレーケは、オランダの水工技術を基本としながらも、日本の国土と自然条件、社会条件を的確に把握し、その特徴にあった河川・港湾の工事を指導しています。特に淀川改修や木曾三川分流を実現した木曾川改修には、優れた実績を残しています。

明治六年の来日から明治三六年の帰国まで二〇〇年にも及ぶ日本の技術者生活を影



ヨハネス・デレーケ(1842~1913)

オランダの水工技術

明治四年、新政府の顧問役を務めていたオランダ人教師、フルグの勧めで欧米視察使節が派遣されました。一行のなかには、新政府の骨格を形成する岩倉具視、大久保利道、木戸孝允、伊藤博文らがあり、一年半に及ぶ長い視察旅行でした。

視察団がオランダのハーグに到着したのは明治六年二月(四日)。此国ハ、欧州列強中ノ一小国ニシテ、回覧実地記に書き留ながら、ハーグを本拠に彼らのオランダ見学は始まり、しかし、これらの記述は次第に驚きと尊敬に変わっていきます。北海の浜からアムステルダムまで全長25km、幅60m、深さ7mの運河新設工事を見学した際には、「世界無比類ナキ大工作ナリ」と感想をもらっています。

当時のオランダの土木技術、なかんづく水工技術に対する評価として、フランス人土木技師がこう記しています。

「オランダにおける公共事業は、この数年以来、非常に目立った発展を遂げている。それらには極めて多くの種類のものがある。たとえば、おもな川に対して新たに河口を開くこと、大きな海洋運河を設けること、従来、非常に狭かつた湊にかなりの拡張をもたらすこと、事実上入海をなしているような極端に幅広い川に堰を設けること、シルト質の土質のために甚



デレーケ(左)とエッセル(右)

から応援していたのは先に帰国したツァセル、オランダと日本、この気の遠くなるような距離を旅したエッセルの書簡は、デレーケに勇気を与え、技術的なアドバイスをなしていたことであろう。

近代治水の祖、デレーケ。この称号は、デレーケの長きに及ぶ功績を称えた日本人の感謝の気持ちに他なりません。



明治13年4月 松方内務卿、石井土木局長らと不動川の砂防工にてデレーケ記念撮影

参考文献

- 『デレーケとその業績』
- 一九八七年建設省中部地方建設局
- 『デレーケの生涯』
- 一九八七年、中日新聞連載
- 『日蘭交流の歴史を歩く』
- 一九九四年NTT出版

明治改修と地域の人々



プロフィール: 三宅 雅子氏

作家。「美濃文学」編集長を務め、1984年に中部ペンクラブ副会長に就任。「阿修羅を棲まわせて」で日本文芸大賞女流文学賞を受賞。99年から同クラブ参与。86年に同人誌長良文学を創刊、主宰。オランダ人技師ヨハネス・デ・レーケを書いた歴史大河小説「乱流」を岐阜新聞に1年間連載。土木学会出版文化賞・岐阜新聞大賞・中部ペンクラブ文学賞・県芸術文化顕彰・その他7つも賞を受賞。代表作となる著書、多数。

となり、破堤入水するのが、この地域の洪水のバターンだった。おまけに、木曾三川の主流山間部は降水量が多く、例えば、昭和五二年（一九七六）九月二二日の安八町で長良川が決壊した時は、その前日に日雨量は大日岳で三四九ミリを記録した。それに木曾川左岸の大山より弥富にいたる五〇キロに連続堤を築造した、お囲い堤も洪水の要因の一つにあげられている。お囲い堤を実証する史料は見当たらないが、築造以後、美濃側の水害が倍加しているところを見ると、事実とみてよいだろう。

こうした土地に住んでいる人たちが、幕藩体制が崩れ、明治の新時代が到来したとき、毎年の様に悩まされていた洪水の防御を願ったのは当然といえる。それと同時に、各輪中はそれぞれ勝手に、堤防を競って高くしていた。

明治元年、笠松県知事長谷川怒連は、水理論をあらわし、海口の梗塞、ふさぎさきざるを疏通すること、河道の水勢を分脈する必要があると、分流の必要を説いている。

翌二年には笠松県直轄下にあった伊勢・桑名郡のうち、四五力村が度会郡三重県へ所属した。

轉変更になつたとき、木曾三川の川筋にあたる村々は、川普請の関係からも、ぜひ同一管内におくことが必要」と政府に要望している。このように、いち早く、分流論や、流域行政一元化」を打ち出している。地域住民は長い洪水の歴史・体験の中から、すでに明治の初期にこれらのことを打ち出していたことに注目したい。平成九年、河川三法に環境が加わり、やうと流域一元化を関係筋は打ち出した。このあと、明治四年には名古屋大参事丹羽賢は、外国人を使って従来と一変した体制で工事に当たれ」と要望し、明治五年には、各輪中の取締役が、三川分流工事の実施を土木司に上申している。個人的には、安八郡土倉村（海津郡平田町土倉）の浄雲寺住職高橋示証は、木曾川三百間（約五五〇メートル）長良・揖斐川を各二五〇間（約四五五メートル）と各川幅を拡張し、河口まで分流改修するよう政府に願ひ出た。彼はこれ以上、水害による村人の葬式を出すのはたまらなかつたのである。

水書誌を見ると、明治三年には三回、四年に一回、六年に二回、七年には一回、八年に一回、一〇年には三回と、各地が破堤し水害が起つて、つまり毎年水害が起るといふことだ。書き出せば切りがないほど、年に二回、三回と被害が出ていた。



高橋示証顕彰碑(浄雲寺)

輪中は田堤形態をもつ水防共同体である。洪水多発の要因は、木曾川・長良川・揖斐川が合流する地形的基礎として、濃尾平野の盆地運動がある。東部の尾張丘陵から各務原台地にかけて隆起し、三川の合流する西濃平野は沈降するといふ東高西底の地殻運動は、過去三万五千年間に千年に対して一、七メートルの割合で

のちに大垣治水会と改め、明治十二年には「水制改修に付地図凡例」を定め、下流改修計画に即応して各輪中の地図の提出を求めている。輪中に出来た初めての治水団体の動きであった。今までの輪中間の軋轢を考えると画期的な出来事だった。

同じく二年一月、福東輪中の五反郷村（現安八郡輪之内村）の片野龍蔵を代表とする安八、石津、海西、多芸、大野、本巢、厚見、羽栗、中島、不破、方原などの西濃・中濃の有力者二〇八名が連署して、「美濃国水理改修懇願書」を提出。治水工事が完成すれば地価二〇〇万円ほどの土地が改良され、そこから支払われる租税は必ず国庫に利するようになる。したがって工事に巨費がかかっても国益に役に立つから、この大事業をすみやかに完成させて頂きたい。土木費百万円のうち、丁中の三分、三〇万円を人民に募集して補助に供するから、一日も早い着手、完成をと膨大な内容の懇願書を提出した。

オランダの水理工師ヨハネス・デ・レーケが調査に初めて木曾川筋に姿を現した時期に合わせ、民間の足並みが揃ったことも、三川改



デ・レーケの揖斐川の現地視察

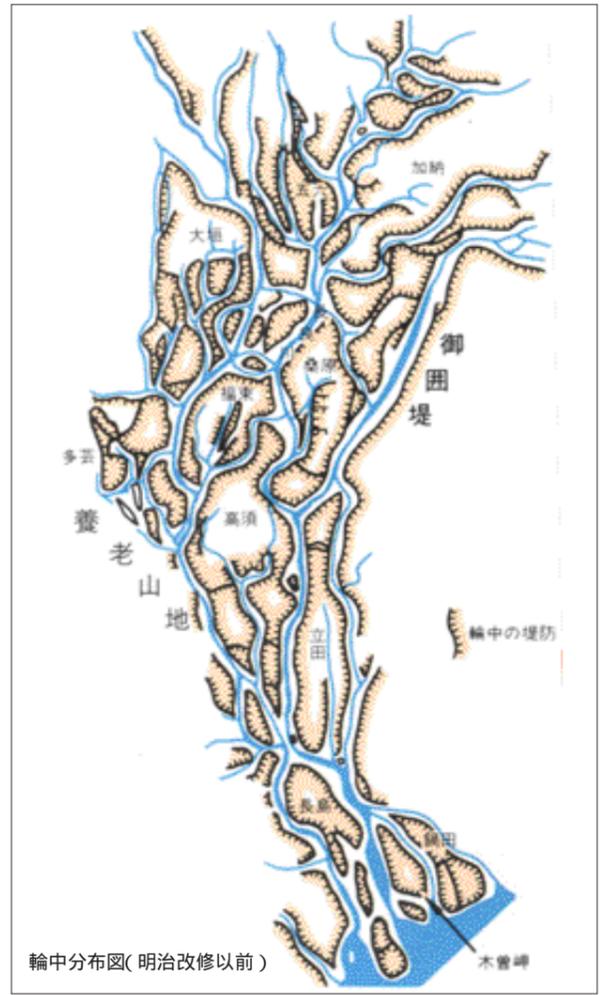
修工事の推進に大きくはすみを付けたのは間違いない。

木曾川下流事務所倉庫に一枚の絵が残っているが、多度山が見える揖斐川筋の調査をしているデ・レーケや通訳の姿、案内をしている黒紋付きの羽織・袴の庄屋らしい男三人が描かれている。彼たち民間人は、役所に頼まれたわけではなく、自ら案内を買って出た。地元民だけに、どの個所が弱く、洪水が出やすいのを一番良く知っている。案内は二名づつ交替で出るようにとの規約も残っている。代表の片野龍蔵の父親片野萬右衛門は、デ・レーケが片野家で休憩していたとき、「三川合流」を提案したとき、「三川合流」と

きまで三川分流のプランをもっていた。卓越した意見だとデ・レーケは側近に洩らしていた。地元有力者たちで結成された、治水改修有志社は、翌二年、治水共同社と改められる。内務省土木局長石井省一郎は、民間から起った治水協力運動に感激、私費五〇万円を拠出して激励した。共同社はやがて、淀川改修期成同盟、琵琶湖治水会、信濃川治水会社などと連携、明治二六年には、全国治水会を結成していく。

ヨハネス・デ・レーケは、学士でないばかりに、仕事好きで服装もかまわない野性的の様に言われているが、神経は緻密であったようだ。

明治一年に木曾川筋へ現われて以来、七年間かけて調査し仕上がった改修計画を、一八年に起った洪水に考え直し、目論見変更を日本人技師に命ずる。納得いかない清水、佐伯の両技師はそれでも変更する。ところが大垣土木出張所へ東京からやってきたデ・レーケは又もや変更



輪中分布図(明治改修以前)

を指示したのである。こんな事ではつまでも仕上らないと、内務省へ上申し、デ・レーケを大垣に滞在させて意思疎通が円滑に運ぶよう計って欲しいと述べる。

この意見はとり上げられ、デ・レーケは大垣に駐在。改修計画は仕上げられていたのである。完璧主義者のデ・レーケ。仕事に忠実な日本人技師。いずれもが改修工事にかに真剣に打ち込んでいたかが上申書によく現れている。

日本で妻・義妹・長男を病気で亡くしながらも三〇年間滞在したデ・レーケもさること



片野萬右衛門の碑

ながら、明治改修に丸となつていた官と地域住民、美濃大震災や一九九年の大洪水に、折角作った堤防が無残に裂け、再び築いていくための資金陳上に上京する金泰吉次郎、彼は日清戦争で一時打ち切られた工事費の要請を、母親の血染めの襦袢を着て陳上に上京、又、議会や陳上で涙を流し、泣き男・治水狂」と言われた山田省三郎。彼らは上流の植林にも力を尽くしている。



民話の小箱

長者平の金鶏伝説

春日村史より

その昔、春日村の美束といつ

集落に長者の一族が住んでいたげな。

なんでも都から落ちのびてきた

身分の高い人の子孫だ、たといつ話じゃ。

土地を開いて粟やひえをきよつさん作り、

その上に米まで作るようになったげな。

米のとぎ汁が毎日毎日川に流されたので、

この川を粕川と呼ぶようになったわけじゃ。

長者の一族がどんなに栄えるようになったのはなあ、

米作りや狩りをしていただけじゃなしに、

砂金といてな、砂のなかから金を選びだして

金の鶏のような置き物を作ったらしい。

長者は賢い頭と金の力で村の長となり、

長い間、ぜいたくな暮らしをしつたげな。

栄枯盛衰も世のならいといつが、

この長者一族の盛りもそろそろ長いと続かんからな。

そのころ、熊坂長範といつ大泥棒が村の長国寺に住み

この寺を根城に金持ちを襲つては

稼をまへつていたといつた。

しかし、ついに捕らえらるむ討ち取られてしまったとつな。

この大泥棒をきよつさんといつたといつた。

長者はついにこの村におれんやうつになつた。

それから一族もつらげりな、はなはなになつてしまつたが、

この土地を追われるつらに長者は

きよつさんためこんだ宝物と金の鶏を

どぶかたつて隠してしまつた。

隠された鶏は、ちうつて行方が知れぬが、

毎年、元旦の朝早く、朝日を浴びて「アハハ」と

ただ三声だけ鳴くといつた。



木曾川文庫利用案内



《開館時間》午前9時～午後4時30分

《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始

《入館料》無料

《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分

名神羽島I.Cから車で約30分

東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》

船頭平開門管理所・

木曾川文庫

〒496-0947 愛知県

海部郡立田村福原

TEL(0567)24-6233



編集後記

弊誌では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近で起こった出来事、地域の情報などをお知らせください。

船頭平開門が重要文化財に指定されて以来、多くの見学者が訪れています。

宛先 「KISSO」編集 FAX(052)571-8627

今号の編集にあたって、春日村のみなさん、三宅雅子氏に大変お世話になりました。お礼申し上げます。

今回は、各務原市を特集します。

木曾川文庫ホームページ

<http://www.kisogawa-bunko.cb.moc.go.jp>

表紙写真

上:粕川 下左:秋の伊吹山

下右上:太鼓祭り(鎌倉踊り)下右下:オミナエシ

『KISSO』Vol.36 平成12年10月発行

発行:建設省中部地方建設局木曾川下流工事事務所 〒511-0862三重県桑名市播磨81 TEL(0594)24-5715

木曾川下流工事事務所ホームページ URL <http://www.cb.moc.go.jp/kisokaryu>

制作:財団法人河川環境管理財団 〒450-0002愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号(東海ビル) TEL(052)565-1976